

平成21年 5月29日現在

研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19530789  
 研究課題名 (和文) 日米の小・中学校における音楽科教員の実践的指導力に関する比較研究  
 研究課題名 (英文) A Comparative Study on Teaching Skills of Music Teachers Between Japan and the United States  
 研究代表者  
 小川 昌文 (OGAWA MASAFUMI)  
 横浜国立大学・教育人間科学部・教授  
 研究者番号：30177141

## 研究成果の概要：

アメリカの音楽の授業は、小学校の場合、ハンドサインによる音程練習はほぼ全国的に行われており、また移動ドによる指導が主流といえる。1時間の授業には多くの教材を用いて、流れのある授業展開を行っている。アメリカの教師は、児童・生徒の音楽スキルを向上させ、音楽的な成長を目指すことを第一に考えており、教師の個性や能力に応じたカリキュラム・授業内容を独自で開発している。学校全体の教育目標に従属するという形でなく、音楽から教育にアプローチするというスタンスがどの学校にも見られた。教師は、常に自分のフィールドの中に児童・生徒を引き込み、教える内容に関する「インサイダー」として授業を組み立てている。我が国において、力量のある教師はほぼアメリカと共通したコミュニケーション能力、音楽能力、指導力を持っているが、学校全体の教育目標への従属を余儀なくされるために、教師の優れた能力や個性発揮できる機会がアメリカほど保証されていないように思われる。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学 教科教育学

キーワード：音楽教師、実践的指導力、日米比較、教員養成

## 1. 研究開始当初の背景

2006年7月の中教審の答申において教員免許の更新制度が提言され、教員の能力評価の制度が固まりつつある。そのような中で、教員の指導力育成が喫緊の課題となってきた。教員の指導力の中でも重要なのは、教員の専門とする教科指導能力であることは疑う余地はない。教科指導は、単なる教員

の専門分野の知識をそのまま伝えるだけでなく、長期間、それぞれの分野と関わってきた教師が持つ様々な人生の「エッセンス」や「知恵」を伴い、子どもと教師をつなぐ強力な「武器」となる。西川純は『心の教科指導』（東洋館出版社、2000）の中で、教科指導が深く生徒指導や道徳教育に係わるものが可能であると主張し、教師の重要な力量形

成を専門教科に求めている。

教育現場においては、これまではほとんど教員の力量の中身や程度についての言及や研究は行われてこなかったといえるだろう。それぞれの授業をどのように上手に「料理」し、明日の授業に役立てていくかという議論は繰り返されてきたが、教員が持つべき指導能力の内容は何なのかといった視点は皆無であったといってよい。わが国の学校教育は、全国標準カリキュラムである「学習指導要領」でおこなわれるため、教師の個人差や能力差はあまり顧みられることはなかったといえる。また、全国の教員養成大学のカリキュラムにおいても、そのような標準カリキュラムを遂行できる教員を養成するために、教員免許の法律に基づいたほぼ「標準」のカリキュラムが実施されてきている。

これは音楽科教員についても該当する。教員が持つ学習のバックグラウンドの如何に関わらず、学習指導要領において教えるべき内容は固定され、教師の個性や力量が発揮することが難しい状況となっている。一方で、合唱コンクールや吹奏楽コンクールなどの課外活動指導では、教師の力量の如何で成績がほぼ決定し、教師間の力量の著しい格差が生じている。そもそも教員がどのような力量や指導力をもつべきなのかという問題について正面から取り上げた研究はほぼ皆無に近い。音楽科において、この問題は今日決して看過できない状況であるといえる。

さて、申請者はこれまで、米国の音楽教育における授業や教員養成の実際について調査を行ってきた。教員の実践的指導力に関連してはこれまでに以下のことが明らかになっている。

(1) 教員免許はほぼすべての州で更新制となっており、特に教員としてキャリアを積み始めた時期において頻繁に教員の実力や実践力がチェックされている。

(2) 教員免許は、中学校、高校は、器楽系、声楽系の2種類があり、それぞれの専門分野のみ教えることが可能である。小学校は、どちらの免許をもっているも音楽授業担当できるという州が多い。

(3) 教員免許の更新時には、各教員は大学等において新たに単位を取得し、それによって更新申請をすることができるというシステムが一般的である。

(4) 音楽科の教員は、原則として(所属する州の教育綱領をふまえて)教材選択や指導の方法に関する自由裁量権を有する。したがって、教師自身がカリキュラムをたてて授業することが一般的である。また、わが国においてよく見られるように、教育目標を他教科や学校全体で共有することはほとんどない。音楽科独自で教育的意義と目標を立てて、学科運営をすることが可能であるし、それが保

証されている。

(5) 小学校の場合、多くの学校は専科制度をとっており、小学校の音楽においても「専門家」が教えることが普通である。

(6) 教員の採用は日本のように各県(政令指定都市を含む)の教育委員会が一括して行うのではなく、米国の場合、原則として、学校単位で行う。採用を希望する者は、教員の求人広告を見て、希望する学校や所属する地方教育委員会の採用試験、面接を行う。この点は、わが国の一般企業の就職活動と類似している。

(7) 大学における教員養成は、約4ヶ月の長きにわたって教育実習を行う点、教育実習以前に様々な機会を通して、教育の現場に触れ、実際に教える経験を積むことができるという点などに特徴があり、わが国と異なってより実践的な力量の育成ができるよう細かく配慮されている。

以上の内容から、教員の能力や指導力についてもきめ細かい評価システムによってチェックされ、音楽教育におけるシステムや教員養成制度にはわが国と大きく異なっていることが明らかである。

## 2. 研究の目的

本研究は、音楽科の教員の実践指導力において日米ではどのように異なるのか、またどのような共通点があるのか、さらに、日米の音楽科における教員養成制度はこれらの教員の力量形成においてどのような直接および間接的な効果を挙げているのか、これらを比較することを主たる目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は大きく(1)日米の学校における音楽科教員の実践的指導力の調査および比較、(2)日米の大学における音楽教員養成カリキュラムの調査及び比較調査を行い、今後の音楽科の教員が目指すべき方向は何か、教員として不可欠な資質・能力とは何か、さらにそれらを実現するために教員養成はどうあるべきかについて考究する。

(1) 日米の小中学校における音楽科教員の実践的指導力の調査および比較

主として、小学校、中学校に勤務する教員が行う音楽科の授業の分析と教師へのインタビューを行う。小学校は、一般的に一般音楽(general music)担当の専科教員およびクラス担任教員、中学校は音楽科担当教員をインタビュアーとして選び、自身の音楽教育観や指導観について取材する。

音楽授業はすべて記録を取り、詳細なプロトコルと共に、どのような指導技術が用いられているのか、教員が意図したことがどこまで実現できているのか、学習者である児童、生徒はどのように学び、教員との相互作用を

起こしているのか、その他記録された内容に従ってできるだけ多くの観点を抽出し、教員としての実践的指導力を判断、評価する。

具体的には、これまで申請者が面識のある地域、学校を訪問することを予定している。わが国においては、神奈川県、東京都、新潟県、静岡県、静岡県の諸学校を訪問する。米国においては、インディアナ州、ミシガン州、フロリダ州の学校を訪問する。

#### (2) 日米の大学における音楽教員養成カリキュラムの調査及び比較

日米の音楽教員の養成機関である大学を訪問し、担当する教員、およびスタッフにインタビューすると共に、実際の講義や演習、および教育実習について、教員になるための実践力をどのように捉えているのか、また、どのようにして実践的なスキルを身につけさせようとしているのかを中心に調査する。

具体的には、わが国においては、教員養成を行っている国立大学法人各大学および、公私立大学をカバーし、それぞれのカリキュラムおよび教育実習の実際について調査する。米国においては、これまで予備調査を行ったインディアナ大学、マイアミ大学、南フロリダ大学に加えて、ボストン大学、ミシガン州立大学を訪問し、調査を行う。

#### 4. 研究成果

(1) タングルウッドシンポジウムの参加  
2007年6月24日から29日までの1週間、ボストン大学の主催による音楽教育シンポジウム『タングルウッドシンポジウム II』が開催された。開催された場所は、マサチューセッツ州にあるウィリアムスカレッジのキャンパスである。筆者はアジアの代表として今後の音楽教育の方向性を探るためのメンバーとして選ばれ、参加した。

#### (2) New Directions in Music Education シンポジウムの参加

2007年10月25日から27日までの3日間、ミシガン州立大学の主催による音楽教育シンポジウム「New Directions in Music Education」が開催された。このシンポジウムのコンセプトは初等および中等教育における実践の向上であり、あくまでの教育現場での内容と質の向上である。筆者は、日本の音楽教員養成と音楽教育についての発表を行った。

#### (3) ミシガン州における調査

##### ①現場教師

ミシガン州の西部は、小学校が2学年毎に分割されて設置されている。ここで取り上げる3つの学校はそれぞれ幼稚園、1～2年、

5～6年を担当する学校である。

#### Brooke Boughton (Fuerstenau 小学校)

30分の幼稚園クラスの授業。2007年10月23日に見学。教師は「ゴードンメソッド」を用いた授業展開を行っている。教師の歌にあわせて児童が入場し、円形に座る。短調による「Hello How Are You Today」で、児童一人一人に歌で挨拶し、児童も一人一人歌いながら教師の挨拶を返す。ドリア旋法による「Audiation」(音楽記憶)ドリル、カデンツァドリルを行った後、リディア旋法による教師の歌唱にあわせて、グロックンシュピール(メタロフォン)を完全5度音程で演奏する。その後「pumpkin patch」「pickidy pickidy bumble bee」の遊び歌を歌いながら身体表現活動を行った。

#### Kelly Salisbury (Schavey Road 小学校)

2年生45分授業。2007年10月23日に見学。ここも「ゴードンメソッド」を用いた音楽授業である。教師の歌にあわせて児童が入場し、円形に座る。ドリア旋法を用いた教師の歌唱と児童の反復唱が中心内容となっている。導入として、二短調の「Hello Sing Along」を教師が歌い、児童に反復歌唱させている。その後、簡単なリズム練習を行った後、短調の新曲を打楽器のリズムを刻みながら練習。一人ひとり歌わせながらリレーして終了した。

#### Heather Nelson Shouldice (Wood Creek 小学校)

これは通常の授業ではなく、2007年10月27日に行われた、先述の「New Directions in Music Education」のシンポジウムにおける、デモンストレーション授業である。

本発表では、小学校の低学年に焦点をあてた「ゴードンメソッド」について、Shouldice氏の勤務する小学校の生徒を実際に指導した。

シンプルで美しい歌を用いて、長音階、短音階、旋法それぞれにおける主音、属音、下属音を身につけさせる方法の実際が提示された。

教師は正確な音程で範唱を行い、児童一人ひとりの力量を的確に判断し、1時間の授業の中で確実に音楽的能力をつけさせることが必要であることが理解できた。

#### Tom Malone (Herbison Woods 小学校)

Tom Malone氏は、最近マサチューセッツ州

から移動してきた新任教師である。筆者とは、マサチューセッツにいた時からの知り合いである。2007年10月26日、氏の勤務する、ミシガン州 DeWitt 市の Herbison Woods 小学校を訪れ、授業を観察した。

前述のミシガン州の3人の教師とは異なり「ゴードンメソッド」を用いず、氏が現在研究している18世紀のアメリカの伝統的な移動ドに基づく指導法を自身の小学校で実践していた。

氏はまず、生徒に古い時代の資料や、歌うために必要な楽譜を見せるために、「現在の黒板」としてのプロジェクターを用いて授業を展開していた。

当時の指揮をしながら、「I don't know what you do not know」の輪唱曲を歌わせることが中心内容であった。

しかし、いくら音楽の歴史を踏まえて指導しても、同じことを繰り返すだけの内容では、子どもたちが興味を持ちにくく、十分に教師の意図が理解されていないように思える授業の得点であった。

## ②教員養成機関

Tom Kratus (ミシガン州立大学)

Kratus氏は今回の「New Directions in Music Education」シンポジウムの責任者の一人であり、ミシガン州立大学の音楽教育学科主任教授として活躍している人物である。

2007年10月25日、筆者は氏が担当する「Song Writing Class」を観察することができた。

このクラスは、音楽教育を専攻している学生が、作曲、演奏発表を行い、演奏する原点を見つめ直すという視点で開講されている。

学生が作成した自身の曲を実際に人前で演奏し、それぞれの生徒、児童からコメントをもらうというスタイルで授業が進行した。

## (4) インディアナ州における調査

### ①現場教師

Cathy Gore (St. Charles 小学校)

2007年10月31日、筆者はインディアナ州ブルーミントンにある Cathy Gore 氏の授業を見るために St. Charles 小学校を訪問した。この学校は、カトリック教会の附属学校として長年地元で大変定評のある小学校である。

ちょうどこの日はキリスト教の大きな行事の一つであるハロウィンであり、教師や児童はそれぞれ思い思いの変装をして、学校にくることが要求されている。

この日の授業は、2年生を対象とし、メインとしてハロウィンの魔女の音楽に、歌唱、合奏、および衣装をつけたパントマイムを行

うという設定であった。Gore 氏の卓越した、コミュニケーション能力と音楽指導力によって、児童は1時間中興味を失うことがなく、集中して取り組んでいた。

Lisa Zorn (Binford 小学校)

同じく2007年10月31日、St. Charles 小学校のすぐ裏手にある公立の小学校

「Binford 小学校」を訪問し、Lisa Zorn 氏の5年生の授業を観察した。リズムパターン、楽典事項のドリルを行ったのち、ハロウィンの歌の一つである「Halloween Blues」を習得し、打楽器で伴奏するという内容であった。

## ②教員養成機関

Lissa May (Indiana University)

Lissa May 氏は、インディアナ大学音楽学部の音楽教育学科の准教授で、教育実習、教育実践を主として担当している。2009年3月8日は日曜日で休日であったが、この日に、音楽教育学科に所属している20人の学生が、それぞれの教育実習の様子、体験を共有するために、May 氏の自宅に集合した。

学生は、小学校、中学校、高等学校それぞれにおいて実習を行っており、各学校の様子や内容についての活発な情報交換が行われた。

## (5) フロリダ州における調査

### ①現場教師

Cynthia Kohanek (PineCrest 小学校)

マイアミ市郊外のコーラルゲーブル市にある PineCrest 小学校に、2008年3月27日 Cynthia Kohanek 女史の授業を観察するために訪問した。この小学校はフロリダでも珍しいランク A の優れた小学校として広く認知され、豊富な予算と優れた教師が雇用されている。

この日は、行事と重なり40分の短縮授業であった。ソプラノリコーダーで音階練習を行った後、楽典事項のダイナミック記号の確認を行い、モーツァルトのピアノソナタ KV. 333 の第1楽章のメロディをリコーダーで演奏するという内容であった。

Kohanek 氏は、実際にピアノや自分の声で巧みに模範演奏や歌唱を用いながら、児童一人ひとりが確実にリコーダーを演奏できるように細かな配慮をしつつ、まとめていた。

Yaron Sarch (Miami Heights 小学校)

2009年3月6日、マイアミ市の郊外にある Miami Heights 小学校を訪問し、Yaron Sarch 氏と Carmen Lopez 氏の音楽の授業を観察し

た。

Sarch氏は5年生の音楽を指導したが、リズムパターン、簡単な聴音による導入の後、ソプラノリコーダーによる、BおよびAの音の演奏を習得することが中心内容であった。Sarch氏は、シンセサイザーによる自動演奏装置を用いながら、ともすると単調になりがちな反復練習を、リレーで行わせ、児童が興味を失わさないような工夫をしていた。

Carmen Lopez (Miami Heights 小学校)

同じ小学校に勤務するLopez氏は小学校2年生の授業を行った。簡単なリズム練習およびへ長調の3和音の構成音の学習が中心の内容であった。移動ドを用いながら、I度、V度、IV度の和音を、ピアノおよびリコーダーで確認していた。

## ②教員養成機関

Joyce Jordan (マイアミ大学)

Jordan教授は小学校音楽教育の専門家であり、「ゴードンシステム」の権威でもある。2009年3月5日、マイアミ大学音楽学部の教室で行われた。この日は、博士課程及び修士課程の学生を中心に、小学生がどのようにして音楽を学んでいくか、リズムおよびオルゴールを用いて実践をしながら確認していた。

Stephen Zdzinski (マイアミ大学)

Zdzinski氏は、マイアミ大学の大学院を担当する准教授であり、筆者とは長い付き合いである。マイアミにおける学校訪問等のアレンジはすべてZdzinski氏に依頼してアレンジをしていただいている。

2009年3月3日、大学院のInternational Music Educationという授業に参加した。この授業は、アメリカ以外の世界の音楽教育について実際にその国の人々を招いてお話を聞きながら学ぶという趣旨である。この日は、日本の音楽教育についての時間であり、筆者がゲストスピーカーとして日本の音楽教育の制度や内容について1時間講義を行った。

## (6) フィンランドにおける調査

### ①現場教師

Vuokko Iivari (Ranskalais-Suomalainen Koulu)

2008年10月23日、ヘルシンキ郊外にある国立フランス学校を訪問し、新任の女性教師Vuokko Iivari氏の授業を見学、観察した。この学校は、国立学校で、小学校から高校までの一貫教育を行い、また、フランス語を小学校1年生から学んでいるユニークな学校である。

Iivari氏は小学校2年生と高校2年生の授

業を行っていた。小学校ではアフリカの民謡を、歌、ボディパーカッション、およびギターを用いて演奏することを目指し、1時間ではぼ仕上げるという内容であった。また、高校では、最初に生徒が持参したロックの音楽をクラスの皆で聴き合った後、西アフリカのジェンベの合奏を行った。

## ②教員養成機関

Jerki Tenni (シベリウス音楽院)

2008年10月22日、シベリウス音楽院で、キーボード演習の授業を見学した。この授業は、教師が現場で様々なパターンの伴奏やアレンジができるよう、主としてポピュラー音楽の学習メソッドを採用している。教室は、ミュージックラボラトリー (ML) であり、学生は一人一台鍵盤楽器に向かって練習が出来るようになっている。また、教師はヘッドフォンを使って、一人ひとりの進み具合や演奏をチェックできる。

Tenni講師は、タンゴの音楽を用いてどのように伴奏を行うべきか、和音進行はどうすべきかについて教科書を用いて説明の後、学生一人ひとりに演奏させたり、即興での伴奏をアドバイスしていた。

## (7) 我が国における調査

### ①現場教師

斎藤隆 (新潟市立東新潟中学校)

2007年12月18日、新潟市立東新潟中学校を訪問し、斎藤隆教諭の音楽の授業2時間を見学、観察した。

1時間目は2年1組の器楽の授業で、リコーダーによるアンサンブルである。教材は「惑星」より「木星」の中間部分の編曲である。

2時間目は1年2組の鑑賞『魔王』の授業である。学校研究授業の一貫として行われ、詳細な指導案をもとに、単に特徴をつかむだけでなく、なぜそのような特徴になるのかを考えさせる、奥の深い授業であった。

斎藤昇 (静岡大学教育学部附属浜松中学校)

2008年2月27日、静岡大学附属浜松中学校を訪問し、斎藤昇教諭の2時間の授業を観察した。

1時間目は1年2組の民族音楽の授業で、「アイヌ音楽」を取り上げた。様々な映像を駆使し、実際にアイヌ民族が学ぶ方法、すなわち口伝による音楽学習を試みていた。

2時間目は2年1組による「箏曲」の授業。日本のわらべ歌の「通りゃんせ」、「お江戸日本橋」「山寺の和尚」をクラス生徒の2人に1台使用して、マスターするように指導して

いた。

西田真弓（東京都星美学園小学校）

2006年2月22日、東京都星美学園小学校を訪問し、西田真弓氏の音楽の授業を観察した。2年1組の授業では、賛美歌を歌い、文部省唱歌「春が来た」の部分2部合唱を行っていた。特に、賛美歌では、1人ひとりに4小節ずつ歌わせていたこと、ハンドサインを用いながらいつも音程確認をしていたことが特筆すべきことである。移動ド唱法をベースに声の音程を揃えることに最新の注意を払っていた。

#### (8) 結論

##### ① アメリカの音楽授業について

- 1) 多くの小学校の授業において、移動ドによるハンドサインが導入されている。
- 2) 音楽概念（音楽構造）、音楽理論は低学年から取り入れられている。
- 3) 小学校は一般音楽（general music）でほぼ必修、中学校以降は吹奏楽、合唱を中心に選択科目として設置されている。
- 4) 小学校から音楽は専科教員がほとんどである。

##### ② 日米の音楽教員に共通してみられる音楽指導のテクニック

- 1) リーダーシップに優れている
- 2) 自身の音楽に自信を持っている
- 3) 巧みな誘導／会話術
- 4) 児童、生徒をよく把握している。（性格、音楽的能力、音楽的嗜好）
- 5) 卓越した伴奏技術
- 6) 間をおかない作業の展開
- 7) 学習者の音楽的行動にすばやく反応し、先を読みながら進めている
- 8) 信頼関係の厚さ／相手に安心感
- 9) 児童・生徒の自由な発想や表現を受け入れる

##### ③ 音楽における実践的指導力の兆候

- 1) 音楽的能力において学習者より優れている
- 2) 音楽の学習の中で、次に何がおこるか学習者より早く知っている
- 3) 学習者が気づかないうちに学習者自身の音楽的成長を実現させる
- 4) 自身のフィールドの中に児童・生徒を受け入れる（my music）

以上

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2件）

- 1 小川昌文、「学校の音楽教師にとって本当に必要な力とは何かー「my music」という概念の導入」、『音楽教育実践ジャーナル』、第5巻2号、2008、pp.73-84。（査読あり）
- 2 小川昌文、「アメリカとフィンランドの音楽教員養成から何を学ぶか」、『音楽教育学』、第38巻第2号、2008、pp.22-31（査読あり）

〔学会発表〕（計 3件）

- 1 小川昌文、「Music Classroom Teaching in Japanese Schools」、New Directions in Music Education、2007.10.27、Michigan State University
- 2 小川昌文、「アメリカ合衆国における音楽教員の実践的指導力ー授業展開と力量形成における日米比較ー」、2008.11.9、日本音楽教育学会全国大会口頭発表、国立音楽大学
- 3 小川昌文、「教員養成大学のイノベーション（パネリスト）」、2008.11.9、日本音楽教育学会全国大会常任理事企画、国立音楽大学

〔図書〕（計 1件）

- 1 小川昌文（共著）、A Brief History of Japanese Music Teacher Training “Origins and Foundations of Music Education,” Edited by Gordon Cox and Robin Stevens. (in print) 2009年冬出版予定（査読あり）

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小川 昌文 (OGAWA MASAFUMI)  
横浜国立大学・教育人間科学部・教授  
研究者番号：30177141

##### (2) 研究分担者

##### (3) 連携研究者